課題解決学習で主体的な読みを可能にする，高等学校古典指導
―「竹取物語」をめぐる対話を通して―

大元　理絵（東京都立野津田高等学校）

１．はじめに

古典は，先人が何を感じ何を考えたのか，いかに生きたのかということを教えてくれる。その世界に触れることで，ものの見方が広くなり，考え方が深まり，人生を豊かにしていくことができる。古典は，時代の変遷の中で様々な評価を受けつつ，読み継がれてきた。我が国の言語文化を享受し，発展させるため，そして国際社会における日本の理解を一層促進していくために，これからも読み継いでいかなければならないものである。

情報化，国際化が急速に進展する現代において，なぜ古典を学ばなくてはならないのか。その意義と必要性を認識しないまま，多くの生徒は単位や上級学校進学を理由に，仕方なく現代語訳や文語文法を暗記しているのが現状である。「古典が嫌いだ」と言い，苦痛を感じている生徒たちの多くは，社会に出ると，さらに古典に触れる機会からは遠ざかるため，生涯にわたって古典の世界に親しみをもとうとする者は僅少である。

「をかし」や「あはれ」は，辞書で完璧に理解できるものではなく，「わび・さび」等の，日本人固有とも思われる感性や情緒は，我が国の季節の移ろいや伝統文化に触れることで無意識に感じ取り体得されている。しかし，現代の子どもたちが自然や植物，色彩に対してしみじみと心を通わせる経験が，どれほどあるだろうか。グローバル化が叫ばれる今日，自身のアイデンティティーを形成する自国の文化を，より深く理解するための古典探究は重要となる。また，時間と空間を異にする「まだ見ぬ世の人」との対話の経験こそ，グローバル化の中で，価値観も生活スタイルも異にする人々とのコミュニケーション能力を，涵養する契機にもなると考える。

全国高等学校国語教育研究大会や国・公・私立高等学校の授業参観等を通して感じるのは，予習内容の確認や訓詁注釈に終始した授業が多いということである。言語活動を取り入れた新たな試みは増えているものの，目的や必要に応じて展開されるものとしては不十分である。

古典を読むためには，古典についての基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けることが望まれる。そのため，語句の意味，用法及び文の構造の理解は欠かすことができない。また，文章を読む中で，文脈に即して意味や用法を習得させる指導を行う場合は，授業者の一方的な指導形態になることが多い。しかし，このような知識注入型の授業の在り方が生徒に「苦痛である」と言わせ，結果，古典嫌いを生み出しているのも事実である。それにも関わらず，従来の授業形態を繰り返すばかりで古典の授業改善がなされていないことは，大きな教育課題と言わざるを得ない。

そこで本研究は，課題解決学習を通してものの見方，感じ方，考え方を広げ深めるとともに，生涯にわたって古典に親しむ態度を育成し，我が国の言語文化の継承と創造の担い手を育てることを目的として，次の研究に取り組むことにした。

（１）高等学校の生徒を対象とした，古典に対する意識と実態調査

（２）主体的な読みを可能にする学習過程を用いた，古典学習の新しい指導法開発

＊主体的な読みを可能にする学習過程とは，「問う」「類推する」「表現する」「比較する」「省察する」５つの学習過程である。

２．高等学校の古典の学習に関するアンケート

（１）高校生の古典の学習に対する意識

語句や文法，現代語訳の学習のために，過度の時間を費やす従来の古典授業の在り方が，古典嫌いを生みだしていると多くの識者によって報告されているが，現在の高校生が古典に対してどのような意識をもって学習しているのか，どのような授業を望んでいるのかの具体的把握が必要であると考え，意識調査を実施した。

調査目的

○「国語総合」の「古典」分野の学習について，生徒がどのような意識をもっているのか，その実態を把握する

○社会人として必要な国語の力を，古典の学習を通して身に付けるための教材と学習指導計画の開発の方向性を探る

調査対象

○都内公立高等学校２年生 640 名（有効回答数 593 名）

○進学指導重点校，進学指導推進校，重点支援校等から８校を抽出

調査期間　　平成 25 年７月上旬～平成 25 年８月上旬

（２）質問紙調査の集計結果から見えてきたもの

①古典の学習全般に関する意識

「古典の学習について，どう感じているか」という質問に対して，「古文が好きだ」と肯定的な回答をした生徒は 23．6%，「漢文が好きだ」と回答した生徒は 19．9%であった。国立教育政策研究所が平成 17 年に実施した「高等学校教育課程実施状況調査」でも，「古文が好きだ」「漢文が好きだ」と回答をした生徒は，それぞれ 23.1%，24.8%にとどまっており，意識の違いは，ほとんど見られない。つまり，国立教育政策研究所が調査した８年前と変わらず，７割以上の高校生が，「古典が嫌い」なのである（図１）。

図１　今回の調査と国研調査の比較

好きな理由は，「覚えれば点数が取れる」「昔の人の生活の様子やものの感じ方が分かる」とあるのに対し，嫌いな理由としては，「古典は外国語のようで難しい」「先生が一方的に話をしていてつまらない」と記述している。

都内公立高等学校の集計データを，難関国立大学進学等の合格実績により３グループに分けてみた。すると，興味深いことに，「古文が好きだ」と答えた割合が，僅かではあるが下位校が高く，中堅校の生徒の意識が最も低い（図２）。

図２　都立高校の集計比較

この差は何を示すのだろうか。次頁の表１「高

等学校の古典の学習に関するアンケート」を分析しながら，詳しく述べていくことにしよう。

②学習内容の把握に関する意識

まず，「古典の文章を音読する」「本文を現代語訳する」などの，基礎的な学習についてどのように感じているかの質問に対しては「興味・関心がある」と答えた生徒は，どの学習も15%程度であったが，同じ学習項目で，「受験に必要であるか」と聞くと，ほぼ60%を超えている。ところが，これらの学習が「社会生活」や「伝統文化の継承や発展に必要だ」という意識は５%程度で，意識が著しく低い（表１）。

表１　高等学校の古典の学習に関するアンケート

高等学校の古典の学習に関するアンケート		興味・関心がある	受験に必要である	社会生活に必要である	伝統文化の継承や発展に必要である
基礎的な学習	古典の文章を[illegible]などこと	16%	55%	5%	22%
	[illegible]を辞書で調べること	13%	66%	6%	8%
	古典の文章を現代語訳すること	18%	64%	4%	19%
	古文のきまり（[illegible]）について学ぶこと	11%	72%	4%	9%
言語活動についての学習	古典の文章を読んで，内容を読み解くこと	21%	56%	5%	17%
	古典の文章を読んで，[illegible]について考えること	20%	58%	6%	17%
	古典の文章を読んで，自分の意見を述べたり話し合ったりすること	13%	51%	18%	18%
	古典の文章を読んで，自分の意見を文章に書いたりまとめたりすること	12%	53%	18%	16%
伝統的な言語文化についての学習	様々な古典の文章を読んで，ものの見方を広げたり深めたりすること	21%	38%	16%	35%
	様々な古典の文章を読んで，作品の価値について考察すること	18%	39%	11%	32%
	様々な古典の文章を読んで，言語文化の[illegible]について考えること	19%	36%	14%	31%
	様々な古典についての課題を設定して調べること	14%	47%	13%	26%

さらに，基礎的な学習の中でも「古典文法」に着目してみると，「興味・関心」が11%であるのに対し，「受験に必要」と答えた生徒が72%と，非常に高い。自由記述には，「受験対策のために仕方なく文法の勉強をしている」とあり，興味や関心は大変低いが，上級学校進学等を意識して，古典についての知識や技能を身に付ける学習をしていることが分かる。このことから，上級学校進学や就職試験に，古典が必要か否かが，前頁図２のような結果につながっていると考えられる。

上位校と中堅校の差は，「覚えれば点数が取れる」という記述から，「テストの点数が高い＝好きな科目」のように感じている生徒が多いと推測できる。よって，「分かる」ことが，古典の学習意識を高めていると読み解くことができる。

しかし，受験を意識して，現代語訳や文法を重視する学習を行うだけでは，古典そのものに対する生徒の関心は高まらないため，結果的に，古典の学習でも育成されるべき言語能力の伸長も期待できない。

③言語活動についての学習に関する意識

次に，言語活動の学習項目について，基礎的な学習と比較してみよう。内容や人物の心情を読み取る学習の「興味・関心」はやや高まっているが，「受験」「社会生活」「伝統文化」に対する意識は同じである。しかし，話したり書いたりする言語活動に対する「興味・関心」は低いものの，「社会生活に必要」と答えた生徒の割合が高くなっている。

④伝統的な言語文化についての学習に関する意識

ここで注目したいのは，「伝統文化の継承や発展に必要か」という質問に対し，様々な古典の文章を読んで，「特有の表現を読み味わう」「ものの見方を広げたり深めたりする」「作品の価値について考察する」学習の意義が全て30%を超えている点である。ここから，生涯にわたり古典に親しむ態度を養うことが大切だと，生徒たちが潜在的に感じているという解釈は可能であろう。

⑤質問紙調査の自由記述から見えてきたもの

従来の古典指導に不満を感じている生徒たちが，どのような授業を望んでいるのか自由記述をしてもらったところ，高校のレベルを問わず，授業改善を強く望む声が上がってきた。その多くは，「語句や文法だけでなく，内容や人物の思想について，深く考えたり想像したりする授業」「人生において必要なことや，自分のいろいろなものに対する考え方を広げてくれるような授業」「日常でも使えるような，興味をそそる授業」「生徒がもっと参加できる授業」「視覚からも情報が入る授業」であった。

また，「本文を一文ずつ訳すのではなく，物語を全体で捉えたい」と記述した生徒がいる。確かに生徒の実態に合わせて本文を一文ずつ現代語訳し，文法などの解説も加えながら丁寧に読み進めていくことも大切である。しかし，そのような進め方では，かえって思想や感情などを読み取ることが難しくなり，ものの見方，感じ方，考え方を広くすることはできない。このような声に応えていくには，原文を読む抵抗感をできるだけなくし，文章全体を意識しながら読む力を育て，書き手の意図や内容を捉えていく学習が必要であることが考えられる。

（３）現代の古典教育の課題

続いて，「古典は難しいものだ」という先入観から抜け出せず，主体的に古典を学習しようとする意識の低い高校生を一つのモデルとして，実際の古典学習の現状を考察したい。

まず原文を眺め，一つ一つの単語を辞書で調べながら現代語訳を試みていく。辞書には複数の単語の意味が並び，どれを選択してよいか分からないまま，適当だと思うものを選択して文章を完成させる。ところが，教師が述べる現代語訳と自身の解釈したものに少しでも齟齬があると，個々の点検をすることなく自身の現代語訳を消去して，教師の述べる訳に書き換える。それぞれの単語の微妙なニュアンスの違い，文脈の中での単語の働き等を全く無視し，延々とその活動が繰り返される。このように，教師の現代語訳を一語一句もらすことなくノートに書き写すだけで安心している姿こそ，古典授業の定番の光景と言えよう。だが，これは，古典の主体的読解とは程遠いものである。

では，教師はどうだろうか。生徒の間違いを正し，作品の解釈を押し付けてしまってはいないだろうか。このモデルの生徒であれば，内容が理解できていないまま，出来上がった現代語訳を丸暗記して定期考査に臨むだろう。そして，考査が終われば，覚えたことは頭の中からすっかり消え去ってしまう姿が，容易に想像できる。これを，受験に置き換えたとしても，同じことが言えるのではないか。

人物の心情や情景描写に触れて感受性を豊かにしたい，実生活との関連をもって学びたい，古典学習でも社会生活で必要な力を身に付けたい，といった生徒たちの望むものは，学習指導要領はもちろんのこと，現在注目を集めている PISA 型リテラシーの資質とも，相通じるものである。そこで，従来の指導を改善し，生涯にわたって古典に親しむ態度を育てるために有効な指導法を開発することが喫緊の課題であると考え，従来の古典指導の実態から見えてきた課題と，古典学習に対する生徒の要望等を踏まえて，これからの古典指導はどうあるべきかの実践と検証を，次節で検討したい。

３．進むべき古典指導の方向性

古典の深い読解のためには,基礎的知識の習得は必要だが,既得の知識や経験を活用し,テキストの情報から類推することで,内容をおおまかにつかむことも可能なはずである。まずは生徒に,自分たちの力で読み取ることができた,という満足感や達成感を味わわせることが大切なのではないか。作品全体を意識してとらえ,生徒が互いの交流を通して読み深めていくことで,主体的な学習を促すことができるのではないか。

そこで本研究では,自己の体験を基に想像力を働かせ,他者との対話を通して,古典を読み,関心を深め,自己の考えを表出していくという授業を実践する。そこには,ものの見方,感じ方,考え方を広げ,深め,書き手の表現意図を捉えて共感したり,疑問をもったり,思索を深めたりする対話を通した言語活動を積極的に取り入れることが必要となる。

①学習指導要領とPISA型読解力

社会生活で必要な力とは,どのようなものなのか。

平成20年1月の中央教育審議会の答申では,言葉を通して的確に理解し,論理的に思考し表現する能力などを育成することや,我が国の言語文化に触れて感性や情緒を育むことが,国語科において特に重視されている。そのことを受けて,高等学校国語科の学習指導要領においては,社会人として生きるために必要とされる国語の能力の基礎を身に付けるという基本的な理念を,今回の改訂でも継承している。

平成25年から段階的に実施されている新学習指導要領の基本方針は,以下の通りである。

> 高等学校国語科は,特に,言葉を通して的確に理解し,論理的に思考し表現する能力,互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成すること,そして,我が国の言語文化に触れて感性や情緒を育むことを重視する。　(『学習指導要領』国語科改訂の趣旨より)

加えて,グローバル化する社会に生きる日本人育成を意識した文部科学省は,「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」という3つのプロセスを繰り返し行う「PISA型読解力」育成にも注目し,主体的に読みを深める指導の改善点を,次のように示している。

> ①テキストを理解・評価しながら読む力を高めること
> ②テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること
> ③様々な文章や資料を読む機会や,自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること　(「PISA調査(読解力)の結果を踏まえた指導の改善　(2)改善の具体的な方向より」)

これを古典指導の在り方に敷衍化するためには,テキストを介して生徒と教師,生徒と生徒,そして生徒とテキストが向き合い深い対話を繰り広げる仕掛けが必須となってくる。

従来の教え込む学習から,主体的に古典を読もうとする学習へ転換するため,論理的に思考する知的活動と,コミュニケーションや感性・情緒の基盤となる言語活動を取り入れたい。言語活動は,目標と関係を明確に示し,思考力・判断力・表現力等を育むために有効な手段となるようにしたい。

生徒同士の対話は,協働による課題解決学習で,活発に行いたい。その仕掛けの一つとして,課題はテキスト全体から複数の根拠を求めることができ,正解が一つに限定されることのないものにしたい。そのような環境を生み出し,主体的な読みを可能にする学習において重要となるのは,どのような問いを,投げかけるかにある。生徒がおもしろいと思い,思わず考えたくなるような問い,読み深めたくなる,思考の入り口となる問い,心を揺さぶり,自己との対話ができるような問いを立てたい。生徒,教師,テキストと対話す

ることで，主体的に読みを深められる学習過程とし，一般的と言われる古典授業からの脱却を図る。

そこで筆者は，PISA 型読解力のプロセスを踏まえ，「問う」「類推する」「表現する」「比較する」「省察する」の５つの過程を核とした，古典の新たな学習活動開発に挑戦した。以下，「主体的な読みを可能にする５つの学習過程」として説明していく。

図３　主体的な読みを可能にする５つの学習過程

筆者作成

②主体的な読みを可能にする５つの学習過程

深い対話へと導くために筆者のデザインした学習プロセスは，次の通りである。

Ⅰ　主体的課題設定把握過程　～問いをたてる～
○異なるテキストを読み比べて課題を設定したり，自ら課題を選択したりする
○課題について，主体的に追究しようとする

Ⅱ　類推過程　～類推する～
○既得の知識や自らの経験に基づいて，課題に対する自己の考えや意見をもつ
○テキストを読み，確かな根拠を求めて判断していく

Ⅲ　表現過程　～プレゼンしてみる～
○自己の考えや意見を相手に分かりやすく伝え，他者との交流を通して読みや思考を深める
○結論に至るまでのプロセスを，他者の共感が得られるよう工夫しながら伝える

Ⅳ　比較・検討過程　～くらべてみる～
○意見交流や複数の情報の比較，発表などから，課題の内容について評価する
○視点を変えたり他の事象と関連付けたりして，多面的・多角的に考察する

Ⅴ　帰納的課題解決過程　～省察する～
○全学習を踏まえて全体を俯瞰し，総合的に判断して考えを広げたり深めたりする
○様々な要素に目を向けて関連性を見出し，統合し，創造する

※　活動形式は，個別とグループ活動を柔軟に組み合わせ行う

４．文章を理解・評価しながら読むことで，主体的な読みを可能にする実践

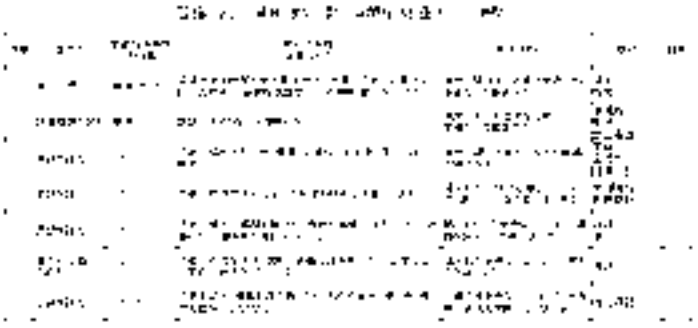
（１）「国語総合」の年間指導計画

「国語総合」は，教科の目標を全面的に受けた基本的な科目で，とりわけ言語活動の充実に資する能力，社会生活に必要な国語の能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとし，全ての生徒に履修させる共通必履修科目として設定している。内容の構成は，様々な言語活動を通して国語の能力を身に付けることができるよう，「話すこと・聞くこと（A領域）」，「書くこと（B領域）」，「読むこと（C領域）」及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の３領域１事項であ

図４　「国語総合」年間指導計画（古文分野）　著者作成

る。本単元では「C 読むこと」（古文分野）を取り上げる。

図５　「国語総合」年間指導計画（漢文分野）　著者作成



（２）単元設定のねらい

ここでは，筆者が平成 25 年 11 月に実践した「国語総合」の事例を紹介する。今回は，東京都立Ａ高等学校２学年（普通科 37 名）を対象に実践を行った。義務教育段階の学習内容の基礎・基本の定着を重視した「学習内容がわかる授業」，「学習意欲が高まる授業」を，組織的に取り組んでいる学校である。また，生活指導を通して，規範意識の向上や生活習慣の確立を全校体制で臨み，生徒の意識を喚起して，安心して通える学校を目指す。学習に対する意欲は決して低くはないのだが，現代語訳を読んでも内容把握に時間がかかり，辞書も購入させていない。また，話し合いや発表をした経験が少ないのが実態である。

事前調査では，「何のために古典を勉強するのか分からない」，「好きになろうとしても好きになれない」と書かれており，他の学校と同様に，古典を読むことに苦痛を感じている生徒が多い。まずは，古典に対する興味や関心を広げて，古典学習の楽しさを実感させる。学ぶ意欲を高めて，主体的に読もうとする態度を育成することが必要である。

生徒が主体的に学習活動を行う上で鍵となるのは，適切な課題設定にある。多様な考えを引き出す本質的な問いを設定して，学びたいという主体的欲求を高め，協働によって課題解決するプロセスを実感させるものとして，本単元では，生徒にとって親しみやすい『竹取物語』の「かぐや姫のおひたち」と「天の羽衣」を教材として選定した。

（３）検証授業

①学習指導案と具体的な評価規準

１　単元名　文章を読んで，書き手の意図をとらえる　「C　読むこと」

２　取り上げる学習指導要領の内容

文章の構成や展開を確かめ，内容や表現の仕方について評価したり，書き手の意図をとらえたりする。（「C読むこと」の(1)のエ）

３　単元の目標

・文章の構成や展開を確かめ，内容や表現の仕方について評価したり，書き手の意図をとらえたりしようとする。（関心・意欲・態度）

・文章の構成や展開を確かめ，内容や表現の仕方について評価したり，書き手の意図をとらえたりする。（読む能力）

・言語文化の特質や我が国の文化について気付き，伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。（知識・理解）

４　取り上げる言語活動と教材

(1) 言語活動：文章を読んで課題について考察し，その内容を発表したり文章を書いたりすること。

(2) 教　　材：「かぐや姫のおひたち」，「天の羽衣」（『竹取物語』）

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
文章の内容や表現の仕方について考察したり，書き手の意図をとらえたりしようとしている。	文章の内容や表現の仕方について考察したり，書き手の意図をとらえたりしている。	我が国の伝統的な言語文化の独自性と価値について，理解を深めている。

②「主体的な読みを可能にする５つの学習過程」を用いた学習展開モデル

第１次

指導事項

単元目標と言語活動の目的，学習内容を伝える
・テキストを単に読むだけでなく，考える力と連動した形で読む力を高める取り組みを進めていくことを確認させる

『竹取物語』の写本を提示する
・写本とテキストを比較させる
・授業者が主体となって全体に問いかけ既得の知識や自らの経験などから考察させる

根拠をテキストから求めていく意識を高めるため，課題①のみ，正解があるものとした。他は多様な考えが引き出せる課題にしている。

【練習課題①】
翁が見つけた竹は，どの部分が光っていたか？

【練習課題②】
翁は，かぐや姫を，竹の中からどのようにして取り出したのか？

練習課題①について，既得の知識や自らの経験などから考察させる
・授業者と学習者の対話で，課題を考えさせる

絵本『かぐや姫』の挿絵を複数提示する
・自分の記憶や絵本の挿絵が曖昧なものであり，絵本が根拠文章として適していないことを実感させる

練習課題②について，既得の知識や自らの経験などから考察させる
・答えに至る筋道が複数あり，根拠と結論も１つとは限らないことを理解させる
・テキストを的確に読み取り，より確かな根拠を求め，判断させる

【グループ課題①】
翁が，かぐや姫を，自分の子どもとして育てようとしたのは，なぜか？

【グループ課題②】
翁が，裕福になったのは，なぜか？

【グループ課題③】
天人が，人間界を「きたなき所」と言ったのは，なぜか？

【グループ課題④】
かぐや姫は，帝に対して，どのような気持ちをもっていたのか？

仮説・予想し，資料を活用して確かな根拠を導き，協働して結論を導き出させる
・模造紙と付箋を使い，思考を整理させる
・iPad のカメラ機能を活用し，グループ活動の進捗状況を映し，全体に周知させる
・話し合った内容をもとに iPad に入力させる

学習活動

主体的学習過程①

単元の学習の目標と活動を理解し，学習の見通しをもつ ・何のためにテキストを読むのか，読むことによってどういうことを目指すのかを知り，追究しようとする	Ⅰ
・平安仮名文字を読み解きながら，これから学習していく作品を類推する	Ⅱ
・自己の考えや意見を，相手に伝える	Ⅲ
・写本とテキストを比較し，評価する	Ⅳ
・幼いころに読んだ『かぐや姫』を思い出し，考えを広げる	Ⅴ

主体的課題設定　**主体的学習過程②③**

文章を読んで課題について考察し，自己の考えをもつ ・テキストを読み比べて，課題を設定する	Ⅰ
・練習課題について考察し，自己の考えや意見をもつ ・テキストを的確に読み取り，確かな根拠を求め，判断する	Ⅱ
・自己の考えや意見を分かりやすく伝える	Ⅲ
・複数の情報から，課題の内容を評価する ・意見交流をして，課題について考察する ・テキストと複数の絵本の挿絵を比較する	Ⅳ
・幼いころに読んだ『かぐや姫』と練習課題から，考えを広げたり深めたりする	Ⅴ

類推過程　**主体的学習過程④**

文章を読んで課題について考察し，自己の考えをもつ ・主体的に課題を設定し，選択する	Ⅰ
・課題について考察し，既得の知識や経験に基づいて，自己の考えや意見をもつ ・文章全体を手掛かりとして根拠を求め，より確かなものを判断する	Ⅱ
・自己の考えや意見を分かりやすく伝える ・出された意見を，意見交流を通して整理する	Ⅲ
・他者との交流から，内容を評価する ・複数の資料を活用して，比較・検討する	Ⅳ
・それぞれが出した意見や資料を活用して最も適切と考える根拠と結論を決める ・結果の検証や結果の解釈を，話し合いながら確かなものにする	Ⅴ

主体的学習過程⑤

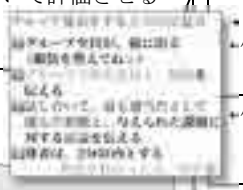
主体的学習④と同じ流れ

ＫＪ法 ➡ iPad　意見を再構築

発表の方法を確認させ，グループ毎に発表させる
・テキストから求めた根拠をもって書き手の意図をとらえ，解釈して導き出した結論を発表させる

iPad を活用して，発表させる
・スクリーンとプロジェクターを２台準備して黒板に映し出す
・１台は発表するグループのプレゼンテーション資料を，もう１台はタイマーを映し出す
・発表時間は２分間とする
・同一課題２グループの発表後，それぞれのスクリーンにプレゼンテーション資料を映し，内容の比較を可能にする

根拠の確かさを評価させる
・ワークシートを用いて，同一課題の２グループの発表内容や根拠の確かさについて評価させる
・評価をした根拠を分析させる



【最終課題①】
かぐや姫が，犯した罪は，なにか？

【最終課題②】
『かぐや姫』が，現代まで広く読み継がれているのは，なぜか？

全体を俯瞰し，多面的・多角的にとらえさせる
・ここまでの学習を振り返り，出された根拠や結論を踏まえて，自己の考えを書かせる

学習活動を振り返り，自己評価させる
・文章の内容や表現の仕方について考察したり，テキスト全体から書き手の意図をとらえたりすることができたか
・我が国の伝統的な言語文化の独自性や価値について，理解することができたか
・古典に親しみをもち，興味や関心が高まったか

表現過程

比較・検討過程　**主体的学習過程⑥**

グループで，根拠を明らかにして，簡潔に発表を行う ・発表方法や評価方法などの，学習の流れを把握し，自己の課題を設定する	Ⅰ
・４つの課題について，知識や経験に基づいて考察し，自己の考えや意見をもつ ・テキストを的確に読み取り，確かな根拠を求め，判断する	Ⅱ
・グループ内で出た意見，テキストから求めた根拠，グループで出した結論を，論理的にプレゼンする ・結論に至るまでのプロセスを，他者の共感が得られるように工夫しながら伝える	Ⅲ
・発表内容を，多角的・多面的に評価する ・他グループの課題について考察し，自己の考えと比較・検討する	Ⅳ
・他者の考えや意見をもとに，課題について自己の考えを再構築し，考えを広げたり深めたりする	Ⅴ

帰納的課題解決　**主体的学習過程⑦⑧**

最終課題について，自己の考えをまとめる ・６つの課題（練習課題を含む）の根拠と結論を踏まえて，最終課題を考察する学習の流れを把握し，課題を選択する	Ⅰ
・ここまでの全学習を踏まえて総合的に考察し，自己の考えや意見をもつ ・テキスト全体を意識して判断する ・生き方や考え方を考察し，考えを深める	Ⅱ
・自己の考えを，ワークシートに，論理的にまとめていく ・読み手を意識して，適切にまとめる	Ⅲ
・ワークシートにまとめた自己の考えを，視点を変えて見直し，再構築する ・複数の資料から根拠の確かさを評価する	Ⅳ
・全学習を振り返り，自己評価する ・社会生活で必要な能力や，言語文化の継承・発展について，考えを広げたり深めたりする	Ⅴ

写真１　iPad を囲んで話し合う様子生

写真２　生徒の発表の様子

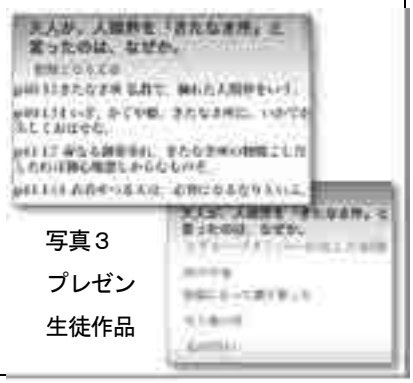


写真３
プレゼン
生徒作品

（4）検証授業の考察

我が国の言語文化に触れて感性や情緒を育むため，主体的な読みを可能にする５つの学習過程を取り入れて，文章全体を意識しながら読む学習活動を実践した。また，ICT 機器の効果的な使用，写本を使用した導入，協働による課題解決学習等，様々な工夫を凝らして学習内容を充実させた。生徒たちにとって，ＫＪ法，iPad，プレゼンテーションは，これまで経験のない学習活動であったが，「これってこういうことじゃない？」「でも，このようにも読めるよ」と，生徒同士の対話の中で，考えを広げたり深めたりする様子が見られた。初めて目にする原文であるにもかかわらず，話し合いが進むにつれて，テキストをじっくり読んで根拠を探す姿が多くなった。適切な教材選定と，課題設定の工夫をすることで，生徒たちは最後まで意欲的に学習に取り組むことができた。

表２のグループの中で出た意見を見ると，同一の課題でも，根拠となる文章が異なるため，Ａグループは「人間の欲望」，Ｂグループは「人間の死」を結論にしている。Ａ，Ｂともに，テキストを広い視野で捉えて，様々な意見を出し合っていることが分かる。

表２　生徒が導き出した根拠と結論

課題③	Ａグループ	Ｂグループ
出された意見	世の中，金が全て。 翁は裕福になって，調子に乗った。 天と地の差。 人間は心が汚い。	人間は金を使う。 きたなき所とは，仏教で穢れた人間界を言う。 死ぬのが汚いと思っている。 天人には感情がない。
選んだ根拠	そこらの黄金賜ひて，身を変へたるがごとなりにたり。	壺なる御薬奉れ。きたなき所の聞こし召したれば，御心地悪しからむのものぞ。
グループが出した結論	結局，世の中は金で変わってしまう。心が汚い人間が多いから。	天界は不老不死で，死は存在しないが，人間には死があるからきたなき所と言っている。

Ａグループの生徒が，学習活動を振り返って，次のように述べている。

> 同じ課題でも，結論や根拠が全然違っていて，それぞれの観点がとてもおもしろい。自分の考えとは全く違う意見も出て，なるほどと共感することが多かった。
>
> Ａグループの方が説得力があったが，Ｂグループの方がしっかりと本文から根拠を探している。Ｂグループは「お金」「感情」「死」など，天界と人間界であるものとないものを出して，２つの世界を比べている。信憑性が高いと思うので，Ｂの根拠がより確かだと思った。

様々な資料を活用して評価し，最も適切だと考える根拠と課題に対する深い考察が行われていることから，建設的な合意形成を目指した言語活動の展開が，言語文化への興味や関心を広げることに有効であることが分かる。

また，発表を聞いていた生徒が，２つのグループを比較して，このように述べている。

> 私たちのグループは「なぜ人間界はきたなき所と言われるか」という課題を選びました。たくさんの中から確かな根拠を選び，意見を一つにまとめることはなかなか難しいなと思いました。話し合いを通したら良い意見になってきました。
>
> 自分が知っていたかぐや姫とは違い，原文のところを読むと，また違った物語がありました。自分の考えをもつことや，根拠などを皆で話し合ってまとめることが楽しかったので，機会があれば，別の単元でやってみたいです。

発表を聞いて評価するという課題に対する興味や関心の高さが伺える。同一課題の根拠の確かさを比較・評価することで論理的思考を働かせ，さらに課題について意見を構築することができている。詳細な読みに偏ることなく，テキスト全体を手掛かりにして根拠を求め，求めた根拠から多様な結論へと考えを広げていくことができる課題は，受動的な授業実態を打破するものとなった。類推・表現する段階では，生徒自身による評価と，教師による評価の融合性に視点を置き，より主体的な活動へと発展させ，自由な発想を引き出すことができた。

課題解決に向けて自己の考えや意見を持ち，テキストを的確に読み取り，より確かな根拠を求めながら思考する。そして，結論を示した上で，その判断の基礎となる考え方を，根拠を示して説明する。さらに他者の意見を聞いて評価し，自己の考えを再構築して深めるという流れを，個から全体，グループから個へと変化させながら，同じパターンを２次の学習で８回繰り返した。このような学習過程を，他の単元や科目，教科の授業に取り入れることで，主体的に読み解き，解決していこうとする態度が身に付き，主体的に読もうとする態度の育成につながる可能性が広がるのではあるまいか。

（５）作品の価値の考察

古典の普遍的価値や意味を考えさせるため，「『かぐや姫』が絵本などで，現代まで広く読み継がれているのは，なぜだと考えるか」という課題を考えさせた。

「子どもたちが共感，理解できるストーリー。お金や人の心理，道徳などの大切なことを教え，受け継いでいくため」「日本最古の物語なのに不思議で，想像の世界が広がっており，引き寄せられる，夢やロマンがある」「読む人に考えさせるので，いま読んでもおもしろいと思える」と答えており，千年以上も前の物語が現代まで読み継がれてきた，作品の価値について認識し，さらに，後世に伝えたいという思いが育まれている。

５．総合考察

検証授業を実施したクラスに，再び同じ項目で意識調査した。図６・図７は，実践前後の生徒の意識を比較したものである。

集計の結果，７割の生徒が古典学習に「興味・関心」があると答えた。また，５割の生徒が「社会生活」や「文化の継承」に必要だと意識している（図６）。

古典を読み味わうためには，古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならない。しかし，訓詁注釈的な学習を強いるだけの授業では，ますます古典嫌いを生み，意義と必要性を認識しないまま卒業することになる。本研究のよう

に，古典に触れる中で自身の知識や価値観に照らして感じたり考えたりする指導の在り方は，古典との対話を促し，生徒同士の交流を深め，古典の学習を生徒にとって価値あるものにしていくことができる。それは古典を学ぶ意義を認識させ，古典に親しむ態度を育成することへとつながっていく。

検証授業終了後，「すごく楽しかった」「かぐや姫の話は素敵だね」「もっと考えたいよ」と感想を言い合いながら，授業で使用した教具を片付けてくれた。

ワークシートの感想には，「友達のいろいろな意見が聞けて楽しかった。古典は意味が分かりづらくて苦手だけれど，今回の授業のように深いところまで考えることが楽しかった。また，こういう授業を受けたい。」を書かれてあった。これらのことからも，『竹取物語』をめぐる対話で，古典に親しんだ様子を見取ることができる（図７）。

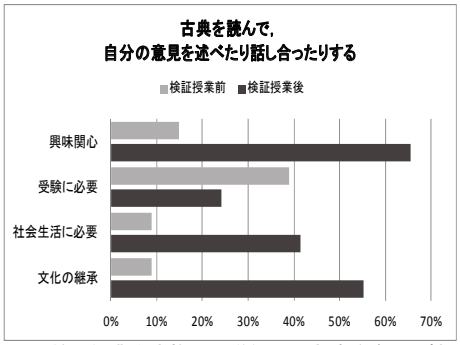


図６　検証授業を実施した学級の，実践前後の比較

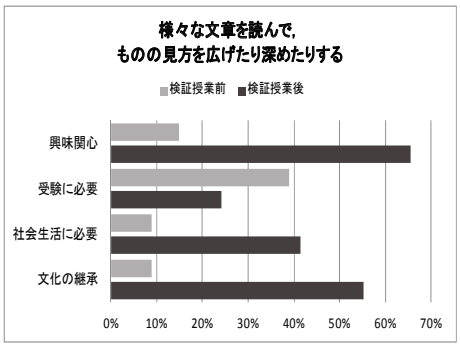


図７　検証授業を実施した学級の，実践前後の比較

古典に触れる中で，自身の知識や価値観に照らして感じたり考えたりする指導の在り方は，古典との対話を促し，生徒同士の交流を深め，古典の学習を生徒にとって価値あるものにしていくことができる。それは古典を学ぶ意義を認識させ，古典に親しむ態度を育成することにつながっていくことを，本研究で証明することができたのである。

６．おわりに

古典の普遍的価値や，その作品が古典として現代まで読み継がれてきた意味について考えさせることは，古典の学習において重要となる。筆者が開発した，「主体的な読みを可能にする５つの学習過程」を用いた新しい古典学習展開モデルは，必要に応じて現代語訳を用いたり，課題設定の内容や提示する数を工夫したりすることで，校種を超えて活用することもできる。また，適切な教材選択をすることで，対象生徒の実態に合わせた学習活動を行うことができる。さらに，映像などの視覚教材を使用教具として取り入れるなどの，発展性も十分に考えられる学習モデルとなっている。

古典を読む楽しさを実感し，主体的に読もうとする態度を身に付けさせることで，「古典を読む能力」のさらなる向上をはかるべく，これからも古典の授業方法の探究を続けたい。

７．主要参考文献

・田近洵一『中学校・高等学校　国語科教育法研究』東洋館出版社，2013
・鳴島甫『高等学校新学習指導要領の展開　国語科編』明治図書，2010
・西辻正副『評価規準をどう創るか　中・高等学校編』明治書院，2011
・文部科学省『高等学校学習指導要領解説　国語編　平成 22 年６月』教育出版，2010